

女たちの明治維新

第三回

東郷益子

画: chinatsu

文: 東川 隆太郎

鹿児島市生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



益子は英国艦隊の砲弾が飛び交うなか、薩摩汁の大鍋を差し入れて息子たちを激励した。

「東洋のネルソン」を
育てた母

今年開戦百十年となる日露戦争は、国家の存亡を賭けた戦争だった。この状況は日本海海戦で発せられた一文「皇国の興廃この一戦にあり」に象徴されよう。結果的に日本海軍の連合艦隊はロシア海軍のバルチック艦隊を撃破、制海権を掌握して戦争を勝利へと導いた。この海戦を指揮した東郷平八郎は、それ以後「東洋のネルソン(※1)」として称えられるようになる。

こうした国家の危機を救う人物を生み育んだ女性たちも賞賛され、国家に役立つ人材の育成が教育界でも推進されるようになった。昭和二年に鹿児島教育会が発行した「郷土婦人の輝」は、まさにこうした時代の流れで出版された本であり、このなかに登場するのが東郷平八郎の母親、東郷益子である。

夫の留守を預かる
しつかり者の女主人

東郷益子は、文化九(一八三二年)十月五日に鹿児島城下で生まれ、東郷実友に嫁ぎ、弘化四(一八四八)年に平八郎を生んだ。実友は郡奉行(※2)として砂防事業や水田開発に従事しており、殿様の湯で知られる指宿二月田には、今も功績の一つを静かに伝える井戸開鑿の記念碑がある。土木事業に携わるとなると自然と地方での仕事が多い立場であつたらうし、その分、母である益子の家庭教育における役割は大きかったことが想像されよう。

東郷家の一族によって昭和十三年に発行された「東郷元帥一家伝記」によると、益子は味噌、醤油、酢、焼酎の製造を家で行い、屋外における農作業においても薪木の処理や馬による作物の運搬に至るまで自ら行っていたという。益子は大変な

(※1) アメリカ独立戦争やナポレオン戦争で活躍したイギリスの海軍提督。(※2) 地方の行政を行う職。農民の管理や徴税などを扱った。



東郷益子 略歴



晩年の東郷益子

- ▶文化9年(1812)
鹿兒島城下に生まれる。
- ▶弘化4年(1847)
四男・平八郎を出産。
- ▶文久3年(1863)
薩英戦争で初陣の平八郎を送り出す。
- ▶慶応3年(1867)
夫・実友が死去。
- ▶明治34年(1901)
享年94歳で死去。
東京・青山墓地に埋葬される。

薩英戦争での活躍

働き者で、夫の留守をしっかりと守る女主人のような人物であったようだ。

益子の最も知られたエピソードとしては、平八郎が海軍の必要性を痛感したとされる薩英戦争での活躍がある。益子は初陣の平八郎を「負くるなよ」の一言で送り出し、英国艦隊の砲弾が飛び交う城下を、戦っている兵のために薩摩汁の入った大鍋を運搬して激励したと伝えられる。

平八郎にとって薩英戦争は初陣であり、後の日本海海戦勝利の礎となった戦と解釈されるようになった。

た。そういう意味ではこれもまた「時代」によって語り広まったエピソードなのかもしれない。物語の細部には創作された部分もあるのかもしれないが、益子には自らができることをやりとげる凜とした薩摩おごじよの姿をみるようである。

益子は明治三十四(一九〇二)年に死去し、青山墓地に埋葬された。「嫁して人の妻となるは難し。然れども、嫁の母なるは更に難し」というのは益子の言葉で、晩年は息子の家庭に立ち入るような事はせず、平八郎の妻とも互いを尊重する良い関係を築いたという。最後まで家族を温かく守り続けた気丈な賢夫人であった。